

33. Supportive Care Medicine の実践について

獨協医科大学

医学部5年 宍戸宏行, 大津留由吏江,
日時加奈恵, 綿引愛美, 近藤辰磨, 吉原花子
基本医学語学教育部門 坂本洋子, 坂口美知子

【初めに】9月8日~9月22日の間, 全米有数のがん拠点病院の一つである City of Hope (以下 COH) における研修を通して, Supportive Care Medicine の実践について学ぶ機会を得た。様々な職種の専門家が “Everybody is on the same page” を標語として共通認識のもとに一丸となって携わるその実践について今回の研修で学んだことを以下で紹介する。

【Supportive Care Medicine について】Supportive Care Medicine とは, 患者とその家族に対する全人的な治療や援助をチーム医療によって行うことである。COH では創設以来 “There is no profit in curing the body if in the process we destroy the soul. (治療において患者の魂を損なうことがあったなら, 身体を治しても何にもならない)” というスローガンのもとに, 患者とその家族に対して身体面だけでなく精神面, 経済面など多方面から患者を支える医療を実践している。COH での Supportive Care Team では緩和ケア専門の医師である Palliative Care Physician の他に Chaplain, Child Life Specialists (以下 CLS) など, 日本では未だ馴染みのない職種の人々も活躍していた。

Palliative Care Physician は SPIKES という困難な場面でのコミュニケーションに有効なプロトコルを用いて患者に告知を行う。Setting (場の設定), Perception (患者自身の病状認識), Invitation (患者からの求めの確認), Knowledge (情報の共有), Empathy (患者とその家族との共感), Strategy & Summary (方針とまとめ) という6つの段階の頭文字をとったこのプロトコルを使用する事によって患者・医師双方の精神的負担を軽減し, 告知された時点を一個人の死の始まりでなく患者及び家族の人生の一地点として, チーム医療による展望のある治療への意識転換が可能となる。Chaplain は病院所属の聖職者で, 病氣と向き合う患者やその家族の「魂の痛み」を癒すためのスピリチュアルケアを24時間体制で担当する。特定の信仰のあるなしにかかわらず患者や家族の精神的ニーズに共感的に寄り添うサポートが実践されていた。CLS は小児患者とその家族, または成人患者の子どもに対して医療的指導・説明, 治療的遊びの提供, グリーフサポートなどを行う専門家で, これらにより患者, 家族, 医療者それぞれの不安やストレスを軽減させることができる。

【考察】COH では医師や看護師だけでなく多くの職種の専門家が共通の認識のもとに連携して Supportive Care Medicine を実践していた。今回の研修を通して学んだチーム医療の大切さを忘れることなく, 様々な専門家と職業の壁を越えて支えあう医療を実践できる医師になりたいと思う。

34. 日本人における体重変化 と食行動の関連 (CIRCS)

獨協医科大学医学部公衆衛生学

梅澤光政, 長尾匡則

【目的】肥満は世界各国において, 重要な健康問題となっている。我が国においても, 男性の肥満者の割合は増加傾向にある。肥満への介入として, 食行動への指導は頻繁に用いられるが, 我が国ではその裏付けとなるエビデンスは少ない。そこで我々は日本人のデータを用いて, 食行動と長期的な体重変化の関連を検討することとした。

【方法】CIRCS (Circulatory Risk in Communities Study) 研究に参加している, 秋田県・大阪府の住民及び大阪府近隣の勤務者のうち, 2001年4月から2011年3月の間に大阪府立健康科学センターの健康診断を2回以上受診し, かつ食行動に関する質問に回答した14489人(平均年齢48.0歳, 平均追跡期間5.1年, 男性61%)を対象とした。食行動に関する調査は, 健康診断の一部として実施した。体重変化に関係があると考えられた8つの食行動について, 初回健診受診時と最終健診受診時の回答(食行動あり・なし)をもとに対象を2×2の4群にわけ, それぞれのこの期間中のBody Mass Index (BMI) の変化を, 分散分析を用いて比較した。

【結果】「朝食を食べない」「砂糖入り飲料を毎日摂っている」「間食夜食を毎日摂っている」「油を使った料理を毎日摂っている」「つい満腹まで食べる」という食行動がある群では, ない群に比べBMIの増加が認められた。「果物を毎日摂っている」という食行動がある群ではない群に比べBMIの減少が認められた。BMIの変化量は「つい満腹まで食べる」という食行動の有無で特に大きかった。

【考察】日本人において, いくつかの食行動が長期的な体重変化に関連していることが認められた。これらは先行研究の結果に沿うものであった。また, 満腹まで食べることは他の食習慣よりもBMI変化量に及ぼす影響が大きかった。

【結論】日本人一般集団および職域集団において, 食行動が長期的な体重変化に関連することが示された。